

日 時	令和6年10月21日（月） 13時00分～15時00分
視 察 先	滋賀県高島市
視 察 目 的	特定事件8 社会福祉の推進について ・地域生活つむぎあいプロジェクトについて
視 察 概 要	地域共生社会の実現に向けた地域生活つむぎあいプロジェクトの取組 包括的支援体制整備、重層的支援体制整備を活用した取組の成果と課題 説明者：健康福祉部社会福祉課くらし連携支援室室長 健康福祉部社会福祉課課長 高島市：人口 46,377 人、世帯数 17,983、高齢化率 35.9%、 面積 511.3 平方キロ ●2050 年推計人口 21,631 人（－18,149 人）高齢化率 50% 人口減、超高齢化、生産年齢人口の激減は現役世代に負担が集中する、子供子育てを社会的に支え、あらゆる世代・ステージに支える仕組みが必要との危機感が生じ、包括的な重層的支援体制整備、地域生活つむぎあいプロジェクトに取り組んだとのこと。 ＊紡ぎあい＝「紡ぐ」は、糸によりをかけ紡ぐ意味に例え、「あい」には人との出会い、話し合える、そして「愛」の意味を込めているとのこと。 この重層的支援体制事業、つむぎあいプロジェクト全体イメージと現在の取組状況、それをリードするくらし連携支援室の取組状況を聞く。 庁内連携つむぎあい会議の役割、協議と成果、各課からの報告、庁内連携のもやもやへの取組、地域別くらし連携会議、見守り事業の取組、相談支援体制など、この重層的包括的支援体制に取り組んでいる内容を聞いた。高島市は来年市政 20 周年を迎える。
所見及び所感	過疎地が多い高島市の高齢化・人口減と、首都近郊の和光市とは異なるが、地域住民の孤立化対策、この地域の人達をつなぎ合わせ、織物のように紡ぐ取組「共助のつむぎあいプロジェクト」は学ぶことが多い行政視察だった。

	説明者のくらし連携支援室室長（社会福祉士）の使命感を持った取組、熱心な説明には敬服し感謝します。
--	--

文教厚生常任委員会委員長 赤 松 祐 造

日 時	令和6年10月22日（火） 13時00分～14時30分
視 察 先	兵庫県尼崎市
視 察 目 的	特定事件9 児童福祉の推進について ・子育て支援「いくしあ」を拠点とした、子ども・子育て支援について
視 察 概 要	尼崎市の人口 457,237 人、世帯数 242,851 令和元年10月「いくしあ」子ども・子育て支援センター（コンセプト） ・子供ファースト 0歳からおおむね18歳の子供が主体となる支援。 ・縦の連携 子供の年齢に応じた切れ目なく継続的な支援。 ・横の連携 福祉、保健、教育などが連携した総合的な支援。 ・背景 児童虐待の増加、いじめ、不登校、集団不適応に悩む子供の増加、発達障害やその疑いのある子供の増加。 児童専門のケースワーカーや医師などの専門職を配置し、寄り添い支援を担う。幅広い相談に対応、不登校児童など、多様な状況をサポート、発達不安の相談など様々な関係機関、民間団体と協力・連携して支援を行う。 （支援機能） ・総合相談、家庭児童相談支援、教育相談・不登校の子供支援、発達相談、青少年ひきこもり、ヤングケアラー支援など子供子育て総合相談を行い、支援歴の一元管理を行っている。 （いくしあの施設） ・1F「総合相談」、2F「発達家庭児童相談」、3F「教育相談・不登校の子ども支援」 ・隣接してあまがさき・ひと咲きプラザ、ユース交流センター（青少

	年向け) ・尼崎看護専門学校、アマブラリ・図書館、あまポートが敷地内に設置 ・広大な施設と土地は、聖トマス大学が閉校となり、大学より尼崎市に土地・建物が寄贈され、その建物の内部を市が改築して活用している。 「いくしあ」の施設は良く考えて作られており、本当に子供ファーストのコンセプトが活かされていた。
所見及び所感	子どもの育ち支援センター（愛称：いくしあ）にふさわしい機能がある施設と組織、運営があるように感じた。 当市で学ぶべき点が多くあり、「いくしあ」のこども相談支援課長の取組の熱心さには敬服します。短い時間だったが多くの事を学べた行政視察であった。

文教厚生常任委員会副委員長 伊 藤 妙 子

日 時	令和6年10月21日（月） 13時00分～15時00分
視 察 先	滋賀県高島市
視 察 目 的	特定事件8 社会福祉の推進について ・地域生活つむぎあいプロジェクトについて
視 察 概 要	地域生活つむぎあいプロジェクトについて・・・ 健康福祉部 社会福祉課 くらし連携支援室 1. 高島市の概要とこれからについて ●和光市と高島市の比較 - 和光市面積はわずか高島市の約1.6%、人口密度は約85倍だが、2050年の高齢化率は共に確実に増える。 ●地域の暮らしのこれから(生活課題) 2. 高島市が目指す包括的な支援体制整備 ●これまでの地域福祉の蓄積と、これからの在り方 ●市行政の役割(枠組仕組みを作る) ●高島市の地域課題に関する論点整理 3. 地域生活つむぎあいプロジェクトの現在地 ●庁内連携つむぎあい会議での協議と成果 ●事前ワークと当日ワーク

	●地域別くらし連携会議(プラットフォーム)の意義と機能 ●地域生活つむぎあいプロジェクトの現在地 くらし連携支援室(多機関協働を推進する事務局)→地域生活つむぎあい会議(市域での他分野連携ネットワーク)→市内連携つむぎあい会議(行政内部のネットワーク)→地域別くらし連携会議(地域での専門職連携ネットワーク)→見守りネットワーク事業(行政と事業者による見守り活動)→参加支援/継続的支援ふれホップ(社会福祉法人等による伴走支援→つむぎあいシート(連携を促進するためのツール)→支援会議(家族全体を意識した支援の検討と役割の分担) 4. つむぎあい(包括的な支援体制整備)による成果と課題
所見及び所感	細やかな気配りで、支援の輪を広げていることに感銘した。 当事者に寄り添い、社会の力を借りてつないでいくプロジェクトは、様々な現場を経験した人と、専門職のプロフェッショナルとの連携で成り立ち、当事者の人権を大切にする、心のある取組であると思った。

文教厚生常任委員会副委員長 伊 藤 妙 子

日 時	令和6年10月22日(火) 13時00分～14時30分
視 察 先	兵庫県尼崎市
視 察 目 的	特定事件9 児童福祉の推進について ・子育て支援「いくしあ」を拠点とした、子ども・子育て支援について
視 察 概 要	1. 事業説明 主に悩みや心配事のある子供や子育て家庭を対象とした総合相談窓口としつつ、身近な子育て相談も含め、幅広い相談に対応する。専門相談員が相談者のニーズを聞き取り、一緒に考え、情報提供や助言、解決イメージを共有する。一人一人の子供の支援歴等の記録を一元的に把握する電子システムにより、迅速かつ適切な支援につなげる。 2. 質疑応答 ・コンセプトとして、児童虐待、不登校、発達障害など幅広く対応し、事業に取り組む上で、最も大切にしていることは？ ➤相談の多様化、深刻化が見られる。また、相談が増加傾向だが、どんな時もその人に寄り添って、専門家の視点を入れて、的確に支援

	すること。 ・虐待などの事例が発生した場合、どのような対応か？ ➤緊急性がある場合は、児童ケースワーカー、児童相談所が警察と連携する。 ・痛ましい事件を防ぐため、どのように児童虐待を早期発見、解決したのか？ ➤アウトリーチにより、ネグレクト、ヤングケアラーを発見した場合、保健師が支援に入り、見守り強化事業を行う。 3. 施設内見学
所見及び所感	市の担当課が庁舎内ではなく、子育て支援の現場に拠点を置き、当事者の声を直接聞いて、課題に向き合い、支援へつなげることに尽力されていることが、未来像の描ける子育て支援につながっていると思った。 拠点となっている施設が、廃校となった大学からの寄贈とお聞きし、最適な環境において、専門的な資格を持った人材を配置しておられる事は、大変参考になった。 専門職の職員をしっかりと配置し、きめ細やかな支援につなげていることが、ハード面、ソフト面共に行われていることが素晴らしいと思った。

文教厚生常任委員会委員 片 山 義 久

日 時	令和6年10月21日（月） 13時00分～15時00分
視 察 先	滋賀県高島市
視 察 目 的	特定事件8 社会福祉の推進について ・地域生活つむぎあいプロジェクトについて
視 察 概 要	「地域生活つむぎあいプロジェクト」を推進する滋賀県高島市に訪問し、地域共生社会の実現に向けた取組、高島市における重層的支援体制整備事業を活用した取組の成果と課題について伺った。 「紡ぐ」という言葉を使うことで、糸によりをかける「撚糸」のように、人と人、人と機会等が紡ぎあえるまちづくりを目指して、行政と関係機関、団体や地域とも連携して取組を進めているとのこと。
所見及び所感	地域生活つむぎあいプロジェクト開始前には、相談支援業務において、「相談窓口が分かりにくい」、「窓口対応力が弱い」、「庁内連携が

弱い」、「情報・進捗管理が不十分」、「地域課題化ができていない」、「地域との連携不足」などの課題があったが、それぞれに取組目標を設定し、課題を克服していったとのこと。

包括的な支援体制の整備に向けたロジックモデル Ver. 1.1 では「お互いが気かけ合いながら、誰もが自分らしく生きられるまちになる」を最終アウトカムに設定し、「住民や支援者が肩書や役割に限らず多能的につむぎあい、困り事の解消が進む環境が整う」を中間アウトカムに設定、直接アウトカムとして様々な指標案を設定し事業を進めて行かれた。

多機関協働を推進する事務局として「くらし連携支援室」を設置し、社会福祉士を中心にプロジェクトの全体統括、地域福祉計画、生活困窮、地域共生、個別相談、見守りネットワークなどを実施している。

多機関協働を行う中で、会議が増える問題を会議のリノベーションでクリアしたというお話は参考になった。

生きづらさ等の生活課題を抱える本人や家族に対して、「つむぎあいシート」を作成し、連携促進ツールとして活用されている点も参考になった。属性や分野でくくれない様々な地域生活課題が複合しており、庁内連携によりしっかり支援をしている点はすばらしいと感じた。

紡ぎあい・多機関の協働による支援は行政だけでなく、市と地域の事業者にも広がっていて「見守りネットワーク事業」として行われている。新聞販売店やタクシー会社、運送業者、薬局など令和6年4月現在で77事業者が協力し、「さりげない見守り」に協力している。例えば、新聞が郵便受けにたまっている場合など、「何か異変を感じた」、「気になることを発見した」時に、必要な機関へ連絡し、連携して速やかに対応できる仕組みを作っている。

和光市においても高齢化が今後急速に進むことが想定される。人口が多い分、行政だけでは支えられない可能性が高い、地域全体で高齢者、子供、子育てを支える仕組みの構築が急務であると感じた。

文教厚生常任委員会委員 片 山 義 久

日	時	令和6年10月22日（火）	13時00分～14時30分
視	察	先	兵庫県尼崎市

視 察 目 的	特定事件9 児童福祉の推進について ・子育て支援「いくしあ」を拠点とした、子ども・子育て支援について
視 察 概 要	尼崎市子どもの育ち支援センター「いくしあ」に訪問し、尼崎市の子ども・子育て支援について伺った。
所見及び所感	尼崎市子どもの育ち支援センター「いくしあ」は、市民の学びや育ちに関する総合拠点「あまがさき・ひと咲きプラザ」内にあり、「いくしあ」のほか、中高生を中心とした若者が交流したり、やってみたいことを実践したり、悩みを相談したりできる施設「ユース交流センター」や教職員が研修で使用する「教育総合センター」が併設された施設である。第一印象として、大学のキャンパスのような施設と感じた。実際、2015年に廃校となった聖トマス大学の敷地と建物が尼崎市に寄附されたとのこと。 「いくしあ」は令和元年3月にオープンし、0歳からおおむね18歳を対象とし、子供ファーストの切れ目のない横断的な支援を行っている。18歳以降も必要に応じて適切な支援につなげるとのこと。 「暴力を受けている」、「家のことで悩みがある」、「学校に行くのがつらい」、「友だちや学校の悩みがある」、「ひとりで悩まないで電話してね」と書かれ、裏側に相談窓口の電話番号が書かれたカードを毎年、小中高校生に配布しているそう。 児童専門のケースワーカーや医師など専門職を配置し、寄り添い支援を担っている。組織分野にとらわれず幅広い相談に対応し、支援歴の情報を「子どもの育ち支援システム」によって一元的に管理。不登校の児童生徒などは教育委員会とも連携して課題に対応している。発達の不安などについての相談にも対応し、心理検査や診察まで支援し、継続的な治療や投薬、療育は地域の医療機関等支援機関を紹介し、連携されているとのこと。 行政だけでなく、様々な関連機関や民間団体とも協力・連携し、子供たちの支援を行っている様子はすばらしいと感じた。令和8年には児童相談所も市内に設置を予定されているとのこと。

文教厚生常任委員会委員 内 山 恵 子

日	時	令和6年10月21日（月） 13時00分～15時00分
---	---	-----------------------------

視 察 先	滋賀県高島市
視 察 目 的	特定事件 8 社会福祉の推進について ・地域生活つむぎあいプロジェクトについて
視 察 概 要	高島市における包括的支援体制整備の現在地 ～重層的支援体制整備事業を活用した取組の成果と課題～ 1 滋賀県高島市の概要 ・地域生活課題にある超高齢化により生産年齢人口が減少し、現役世代への負担が集中し、あらゆる世代に支え合う仕組みが必要。 2 高島市が目指す包括的な支援体制整備 ・平成 29 年度：相談支援の現場から把握した課題で論点整理 ・令和 3 年度：重層的支援体制整備事業の移行準備 単独事業では他の事業内容に係る案件に対応できないため重層的支援体制で対応が必要。 ・令和 5 年度：体制整備の評価 「お互いが気かけあいながら、誰もが自分らしく生きられるまち」を最終アウトカムに設定。 3 地域生活つむぎあいプロジェクトの現在地 ・「高島市地域生活つむぎあいプロジェクト」の名称について 地域生活：住み慣れた土地での日々の暮らし 紡ぎあい：健康・福祉政策を糸によりをかける「撚糸」に例え 「紡ぐ」と出会い（人、関係者、愛）の「あい」から命名 ・くらし連携支援室の体制 チームリーダーの室長（社会福祉士）、包括化推進員、相談支援員。 くらし連携支援室が進行役となり、市域での他分野連携ネットワークにより、複合案件に対応する。 4 つむぎあい（包括的な支援体制整備）による成果と課題 ・他分野同士の協働につながる芽が出始めているが、個別支援の重層とまちづくりの融合が今後の課題。 5 和光市からの事前質問への回答
所見及び所感	高島市の担当職員の熱量の高さが重層支援体制整備事業の推進力となっていることを感じた。

日 時	令和6年10月22日（火） 13時00分～14時30分
視 察 先	兵庫県尼崎市
視 察 目 的	特定事件9 児童福祉の推進について ・子育て支援「いくしあ」を拠点とした、子ども・子育て支援について
視 察 概 要	1 「いくしあ」のコンセプトと特長について 育む施設「育舎」から「いくしあ」の名称となる。 子供ファースト（0歳からおおむね18歳の子供主体の支援） 縦の連携（年齢に応じた切れ目のない支援） 横の連携（福祉、健康、教育などの連携した総合的支援） 2 事業設立の背景 子供や子育て家庭を取り巻く状況が多様化、複雑化、深刻化。 単独機関だけでの対応で解決が困難なケースが増加。 年齢の切れ目のない総合的な支援が現状難しい。 3 「いくしあ」の支援機能 総合相談、家庭児童相談支援、教育相談・不登校の子供支援 発達相談支援、青少年ひきこもり支援、ヤングケアラー支援 4 総合相談から支援歴をシステムで一元管理し、情報を関係部署で共有する。 総合相談窓口で専門の相談員が聞き取ったニーズを、電子システムで一元的に管理し、児童情報、ケース登録、対応記録は、厳重なセキュリティの下で管理。 5 その他 敷地と建物については、廃校となった大学の施設を寄贈された。 令和8年度から児童相談所業務の移管を受けるため、市として一貫した支援が可能となる。
所見及び所感	子供を取り巻く環境が多様化、複雑化して深刻な案件も増えていることから、複数の機関が連携して対応しなければ解決が難しい事は、どの自治体でも同じで途上であると認識できた。

日 時	令和6年10月21日（月） 13時00分～15時00分
視 察 先	滋賀県高島市
視 察 目 的	特定事件8 社会福祉の推進について ・地域生活つむぎあいプロジェクトについて
視 察 概 要	1 高島市の地域や暮らしのこれから（地域生活課題について） 2 高島市が目指す包括的な支援体制整備 （1）高島市での官（行政）と民（社協・地域等）の役割と連携イメージ （2）市行政の役割（枠組・仕組みをつくる） （3）高島市の地域課題に関する論点整理 3 地域生活つむぎあいプロジェクトの支援会議 （1）庁内連携つむぎあい会議での協議と成果、報告 （2）地域別くらし連携会議（プラットフォーム）の意義と機能 4 つむぎあい（包括的な支援体制整備）による成果と課題 （1）つむぎあい（多機能協議）による相談支援の事例 （2）実践報告（外部からの取組評価） ※参考資料 くらし連携支援室につながる相談支援の状況について（令和5年度実績）
所見及び所感	誰一人取り残さない地域共生社会の実現に向けて「地域生活つむぎあいプロジェクト」について視察させていただいた。 障害者、高齢者、子供等において、福祉制度の縦割りでは、複合的な課題の対応が難しく「包括的かつ重層的な相談支援体制」の構築として、①相談支援体制の強化、②社会参加の伴走支援体制の強化、③地域づくりに向けた支援体制の強化と、以上3つの取組について事例を含めての説明だった。 特に印象的だった内容は、①相談支援体制の強化では、担当業務以外で受けた相談については庁内の連携、適切に相談先につなげる体制、②社会参加の伴走支援体制の強化では、当事者に合った計画の作成や訪問できる専門職の配置、③地域づくりに向けた支援体制の強化では、地域別の連携や連携会議だった。 現場での課題、関係者との認識の共有として、支援会議で作成する「支援共有・行動連携計画シート」では、特定のメンバーだけではな

	く、関わっているメンバーで役割を持ち、個別支援を意識し、実体験する中からメンバーの発言も多くなったこと、関係するメンバーの資質向上や超過勤務の削減には、多機関と協働できる専門職の配置、異動があっても総合力を発揮できる体制は、相談員の増員もしつつ高島市の取組を早急に取り入れていくべきだと感じた視察だった。
--	--

文教厚生常任委員会委員 松 永 靖 恵

日 時	令和6年10月22日（火） 13時00分～14時30分
視 察 先	兵庫県尼崎市
視 察 目 的	特定事件9 児童福祉の推進について ・子育て支援「いくしあ」を拠点とした、子ども・子育て支援について
視 察 概 要	子どもの育ち支援センター「いくしあ」を拠点とした子ども家庭総合支援について 1 「いくしあ」のコンセプトと特徴 （1）児童虐待、いじめ、不登校相談件数について （2）子供の発育、子育て等の不安を感じる保護者について （3）子育て家庭を取り巻く環境の多様化、複雑化、深刻化について 2 「いくしあ」の支援機能 （1）各相談支援の専門職の配置について 3 総合相談と支援歴の一元管理 （1）一人一人の子供の支援歴等の記録を一元化する支援内容について 4 家庭児童相談支援 （1）尼崎市と兵庫県の連携について 5 教育相談・不登校の子供支援 （1）教育職といくしあ内の専門職員との連携について 6 発達相談支援 7 青少年ひきこもり支援 8 市児童相談所の設置 9 「いくしあ」で実施している事業 10 「いくしあ」のフロア及び施設概要説明
所見及び所感	児童虐待や不登校、発達障害等、日々の暮らしの中で課題や困難を

	抱える子供達、また、子育てや子供の教育に不安を感じる保護者を支える総合施設を視察させていただいた。 教育分野、福祉分野、子供分野と組織の分野にとらわれず、縦割りではない幅広い相談対応、組織の縦と横の連携、支援歴の情報を一元的に管理、関係機関や民間団体との協力・連携での支援体制について説明を受けた。 和光市でも取り組むべき政策提言として、 ①組織分野にとらわれず幅広く関わりのある職員全員が情報を共有し、早急に対応するため、支援（総合相談、家庭児童相談、教育・不登校の子供の相談、発達相談、青少年ひきこもり相談、ヤングケアラー相談）全てに専門職を配置していくこと。 ②相談支援の内容の情報を一元的に管理することを前々から和光市でも取り組む予定であったが、未だに実現していないので、この件についても再度体制を整えていくこと。 最後に、③発達相談支援については、療育機関につながらないケースを対象に、心理検査や診察を通して、今後、作業療法、感覚統合療法等で関わり方の支援方法を考えていくべきことなのかと感じさせられた視察だった。
--	--

文教厚生常任委員会委員 吉 田 活 世

日 時	令和6年10月21日（月） 13時00分～15時00分
視 察 先	滋賀県高島市
視 察 目 的	特定事件8 社会福祉の推進について ・地域生活つむぎあいプロジェクトについて
視 察 概 要	現場の「連携・つながりが弱いのでは？」といった課題認識から関係者間での包括的支援の必要性に関する認識を共有、各課の会議とその内容を洗い出し、ゴールまでの流れを明確化していた。 また、こうしたケースの積み重ねにより、個別支援から地域課題を整理し、実際に市の運営に反映させる取組を、職員の方から丁寧に解説していただいた。
所見及び所感	生活相談をお受けした時に、相談人の人生をお聞きすると、抱える複合的な困難、多方面からの支援の必要性を感じることは多々ある。 しかし、課をまたいでいたり、対応の期を逃していた場合、遑って支

	援することは時に困難である。 日本社会が抱える低賃金と同時に進行する物価高騰、超高齢化社会における諸問題。高齢・障害・子供・生活困難の問題に市民の実際のケースから向き合い、相談を受けてからゴールまでを包括的に取り組む必要性を再度感じた。 また、組織が大きくなるほど会議が増えていくのは実感であるが、会議の必要性は認めるものの、生産性を伴うのは工夫が必要だと確認した。
--	--

文教厚生常任委員会委員 吉 田 活 世

日 時	令和6年10月22日（火） 13時00分～14時30分
視 察 先	兵庫県尼崎市
視 察 目 的	特定事件9 児童福祉の推進について ・子育て支援「いくしあ」を拠点とした、子ども・子育て支援について
視 察 概 要	児童虐待・不登校・発達障害など、日々の暮らしの中で困難を抱えた子供と子育て家庭に寄り添い、支援するために整備された総合施設を視察した。また、丁寧な説明の後、施設内を一室ずつ見学した。 対象となる子供は0歳から18歳まで、職員と共に子供の専門職を随所に配置。また、相談を寄せられた時から電子システムで支援履歴を一元管理できるようになっているとのこと。 支援において子供を一番に考えつつ、家庭が抱える諸問題について、複合的な支援のアプローチを試みていく内容となっている。
所見及び所感	子供の抱える困難は、親の抱える困難でもある。また、子供の抱える困難を理解することは親御さんにとってもとても大変なこと。 今回、いくしあを見学すると、御両親を支える工夫があった。施設入り口にはサロンという子供が遊べるコーナーを設け、親子に職員が付き、子供が遊んでいる間に自然に会話ができる環境があることはとても印象的だった。また、マジックミラーと部屋の中の音をイヤホンで親が聞けるようにした部屋もあり、家庭以外で困難を抱えた子供であると指摘されたケースなどに利用すると伺った。親御さんが家庭以外での子供の様子を見聞きし、子供もの抱えている困難を正しく理解する一助としている。早期発見が将来を左右する場合もあると思うの

	で、素晴らしい取組と感じた。 また、支援状況を電子による一元化の管理によって複合的な支援が可能となっている点は、課をまたいでの支援をスムーズにし、職員全員で支援の進み具合を確認でき、支援に有効であると感じた。
--	--

文教厚生常任委員会委員 萩 原 圭 一

日 時	令和6年10月21日（月）13時00分～15時00分
視 察 先	滋賀県高島市
視 察 目 的	特定事件8 社会福祉の推進について ・地域生活つむぎあいプロジェクトについて
視 察 概 要	高島市は琵琶湖の西側に位置し、平成17年に5町1村が合併してできた。面積約693km²（和光市の約63倍）、人口約4万5千人で少子高齢化が進んでいる。 令和元年度に「くらし連携支援室」（3名）を開設し、様々な機関の協働による包括的支援体制を構築し、令和4年度に重層的支援体制整備事業を開始した。「つむぎあいシート」による連携が特徴である。 「くらし連携支援室」は、障害・介護・生活困窮・ひきこもりなど、複合的な困難を抱える世帯への支援を各機関と調整している。どこに相談すればよいか分からない人から直接相談を受けるほか、庁内各課や相談支援機関からつなぐ場合は、「つむぎあいシート」のA・B票を作成して調整依頼する。これを受けたくらし連携支援室がC票で今後の対応を考える。つないだ人、既に関わっている支援者、これから関わりが必要になりそうな人を集めて支援会議を開催している。 また、社会参加支援「おれホップ」やアウトリーチなどの継続支援のプラン確認を行うため、重層的支援会議を毎月1回開催している。中学校圏域に専門職同士の「くらし連携会議」、日常生活圏域に社協を中心とした「見守り会議」などもある。郵便配達員、新聞配達員、生協職員などからも、住人の異変に気づいたら連絡が来る見守り体制を構築しており、協力事業者は増えているという。
所見及び所感	高島市の高齢化率（65歳以上）は約37%と高く、過疎化・希薄化・孤立化が進んでいる。担当者のお話を伺って、いかに地域の人と人のつながりを保つか苦労していると感じた。困難を抱える世帯への支援は大変だと思うが、様々な会議を構築していくのが理論的であり、担

	当者の信念を感じた。
--	------------

文教厚生常任委員会委員 萩 原 圭 一

日 時	令和6年10月22日（火）13時00分～14時30分
視 察 先	兵庫県尼崎市
視 察 目 的	特定事件9 児童福祉の推進について ・子育て支援「いくしあ」を拠点とした子ども・子育て支援について
視 察 概 要	兵庫県尼崎市は大阪市に接し、面積約50.7km²、人口約45万4千人である。 「いくしあ」は育児・成長を支援するとともに、児童虐待や不登校、発達障害、ひきこもりなどに対応する総合施設である。切れ目のない継続的な支援と、福祉・保健・教育など様々な機関が連携した総合的な支援を行う。支援歴の記録を、セキュリティに注意しながら一元的に管理し、支援に関わる人が見ることができる。心理士、精神保健福祉士、保育士、社会福祉士、スクールソーシャルワーカー、医師、保健師、作業療法士、言語聴覚士など、豊富な専門職を有する。 南北2ヶ所の保健福祉センター（母子保健）と「いくしあ」が連携して児童虐待の早期発見・早期対応に取組、見守り、心理的ケア、児童虐待再発防止プログラム、要保護児童対策地域協議会などを行っている。 また、不登校児童の居場所づくり（教育支援室など）・学習支援、教育相談、スクールソーシャルワーカーの活動、中高生が匿名で相談できるアプリ、ハートフルフレンド（学生や社会人の派遣）、発達相談支援、作業療法、親や教員へのトレーニングなど、様々な取組を行っている。また、中核市として令和8年度に児童相談所を県から移管する予定である。
所見及び所感	もともと大学だった施設を譲り受け、敷地内には「いくしあ」の他にも、子供たちが活動できる施設や、県の児童相談所などがある。「いくしあ」には、相談室や発達検査室などが整備されている。10ほどある相談室が満室になることもあるそうで、「いくしあ」が住民にとって信頼される施設になっていると感じた。 地域の関係が希薄になっている現代では、弱い立場の子供を虐待から救えるのは行政しかない。痛ましい事件が後を絶たないが、事件が

	起こってからでは遅い。行政はあらゆる手段を使って早期に虐待を把握し、子供の保護に全力を尽くさなければならない。
--	---

文教厚生常任委員会委員 菅 原 満

日 時	令和 6 年 10 月 21 日（月） 13 時 00 分～15 時 00 分
視 察 先	滋賀県高島市
視 察 目 的	特定事件 8 社会福祉の推進について ・地域生活つむぎあいプロジェクトについて
視 察 概 要	・市の概要：人口 46,377 人、人口密度 90 人/km²、面積 511.3 km²、高齢化率 35.9%（以上、令和 2 年国調）、高齢化率（社人研 R5 推計）50.0%。 ・背景：「互助共助公助での高齢者を支える仕組み」、「子ども・子育てを社会的に支える仕組み」、「あらゆる世代・ステージに支え合える仕組み」が必要と捉えた。さらに、「地縁の希薄化、ひきこもりといった孤立化、交流の希薄化」に対する仕組みの必要性を認識。 ・経緯：相談支援の現場から見た 6 つの課題から取組目標を定めた。 ・『重層的支援体制整備事業』へ移行するため、分野別相談支援センター連絡会で以下のポイントについて協議、検討を行った。 「個別相談支援における連携」、「既存事業における連携」、「開発的取組における連携」の三点。 ・体制整備を評価する指標が必要として検討を行う。（令和 5 年度）分野別相談支援センター連絡会員、大学教授などにより構成される「包括的支援体制整備評価のためのワークショップ」により整理。 ・「高島市地域生活つむぎあいプロジェクト」は市が実施する地域共生社会の実現に向けた取組の名称である。 ・従来の各支援事業の会議体について、情報を共有し、会議体のリノベーションを図った。庁内連携つむぎあい会議として、「今の制度や仕組みで応えきれない課題があるから開発」として『今ある仕組みを変える』、「単独の部署で応えられない問題があるから連携」し、相互理解、他施策の知識を得るとしている。 ・具体的事業の多機関の調整、推進する事務局として、社会福祉課に室長（主監・社会福祉士）、包括化推進員（主任・社会福祉士）、相談支援員（会計年度任用職員・専門職）の 3 名で「くらし連携支援

	室」を令和元年度に設置した。 ・合併した経緯があり、専門職連携の場として地域別くらし連携会議を開催している。「住民福祉協議会」があり、連絡・連携している。
所見及び所感	・3名体制のくらし連携支援室で、多機関協働の調整事務についての負担については、他機関との連携において十分に対応しているとのことであり、要の組織として機能していると感じた。 ・課題から解決策をいかに構築していくかという意識を持つての会議や連携への取組について、各職員各部署の認識の共通化の必要性を感じた。

文教厚生常任委員会委員 菅 原 満

日 時	令和6年10月22日（火） 13時00分～14時30分
視 察 先	兵庫県尼崎市
視 察 目 的	特定事件9 児童福祉の推進について ・子育て支援「いくしあ」を拠点とした、子ども・子育て支援について
視 察 概 要	・開設：令和元年10月。「児童虐待や不登校、発達障害など、日々の暮らしのなかで課題や困難を抱える子供たちと子育て家庭に寄り添い、支えるための複合施設」。 ・背景：「児童虐待の相談件数の増加」、「いじめ、不登校、集団不適應に悩む子供の増加」、「発達障害やその疑いのある子供の増加」が挙げられている。従来も会議体で情報の共有、連携した対応はしてきた。 ・施設は、以前私立大学の校舎、敷地を寄附受入れにより一部改装して活用している。 ・「いくしあ」（『いくしゃ（育者）』から『いくしあ』となった。 ・「いくしあ」の支援機能としては、「総合相談」、「家庭児童相談」、「教育相談・不登校の子ども支援」、「発達相談支援」、委託で「青少年ひきこもり支援」、「ヤングケアラー支援」となっており、医師、心理師、指導主事、保健師、保育士、作業療法士、言語聴覚士等が配置されている。 ・市の南北に保健福祉センターがあり、妊娠期から子育て期にわたる総合相談や支援の機能も果たしており、「子どもの育ち支援センター

	いくしあ」と連携強化を図っている。 ・新学年が始まる際に、全児童生徒に「ひとりで悩まないで電話してね」と名刺形のカードを配布し、相談案内を行っている。 ・なお、令和8年に市の児童相談所の開設を予定している。 ・「ユース交流相談」（ひきこもり）として、15歳から20歳の青少年を対象としてスタートし、令和2年からは29歳までに拡充した。中学校を卒業すると行き場がなくなる可能性があり、毎年中学校を回って（相談）につなげていくようにしている。
所見及び所感	・常勤の医師が配置され、保険診療対象の施設として機能していることは、すばらしい取組と感じたが、行政規模や他機関との連携を工夫して取り組んでいくことも考えていく必要性を感じた。 ・「育児支援システム」として、相談履歴、家族状況などそれぞれが児童情報を入力し、情報共有（アクセス権など個人情報保護に十分に配慮。）、支援につなげている点は参考になると認識をした。 ・カードの配布、ひきこもりの把握や支援に関して、積極的に周知し支援につなげる取組は、参考になる認識をした。

文教厚生常任委員会委員 鎌田 泰春

日 時	令和6年10月21日（月） 13時00分～15時00分
視 察 先	滋賀県高島市
視 察 目 的	特定事件8 社会福祉の推進について ・地域生活つむぎあいプロジェクトについて
視 察 概 要	従来の福祉サービスでは、利用者が複数の窓口を回らなければならず、不便な面があった。高島市では、この課題を解決するため、「地域生活つむぎあいプロジェクト」を推進している。 このプロジェクトでは、地域住民や多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会の実現を目指している。 担当者から、地域住民が主体的に参加できるような仕組み作りや、関係機関間の連携強化などについて説明を受けた。
所見及び所感	重層的支援体制の整備には、主に2つの課題があると感じた。 1. 予算的な制約：重層的支援体制の整備には、新たな予算が必要

	となる。しかし、多くの自治体では、既存の事業の予算を削って充てるケースが多く、十分な予算が確保できるとは限らない。特に、縦割り行政で個別に予算が配分されていた事業については、その予算が減ってしまうため、新たな体制で必要なサービスを十分に提供できるか懸念される。 2. 支援の質と量のバランス：重層的支援体制では、様々な機関が連携し、よりきめ細やかな支援が可能になると期待される。しかし、全ての住民にきめ細やかな支援を行うためには、人的・物的資源が不足する可能性がある。 これらの課題を踏まえると、重層的支援体制の導入が必ずしも住民福祉の向上につながるとは限らないことが想定される。自治体によって、人口構成や高齢化の進み具合、住民のニーズなどが異なるため、一律に同じような体制を導入することが適切とは限らない。 高島市のように高齢化率が高く、人口減少が進む地域では、重層的支援体制によって、高齢者の複雑なニーズに対応し、よりきめ細やかな支援を提供できることが期待できる。一方、和光市のように人口が増加し、高齢者数が増加していく地域では、量的な支援のニーズが高く、重層的支援体制によって、かえって支援が行き届かなくなる可能性も考えられる。 このように、重層的支援体制の導入は、それぞれの自治体の状況に合わせて、慎重に検討する必要がある。住民福祉の向上を目的とした支援体制を構築するためには、人口動態、住民ニーズ、財政状況などを総合的に分析し、最適なモデルを構築することが重要だと感じた。
--	--

文教厚生常任委員会委員 鎌 田 泰 春

日 時	令和6年10月22日（火） 13時00分～14時30分
視 察 先	兵庫県尼崎市
視 察 目 的	特定事件9 児童福祉の推進について ・子育て支援「いくしあ」を拠点とした、子ども・子育て支援について
視 察 概 要	子どもの育ち支援センター「いくしあ」の事業内容及び施設内の視察をした。同センターは、妊娠期から18歳までの児童生徒、そして29歳までのひきこもりの方までを対象に、相談事業、子育て支援、

	発達支援など、多岐にわたるサービスを提供している。 特に、近年増加傾向にある発達障害への対応として、運動室や感覚統合室といった専門的な設備を活用し、児童生徒の現状を適切に把握し、個々のニーズに合わせた支援を行っている点が特徴。南北の保健福祉センターと連携することで、地域全体を網羅したきめ細やかな支援体制を構築している。
所見及び所感	大学の跡地を利用しているため、広々とした敷地内に様々な行政施設が集約されており、幅広い年齢層に対応できる複合施設となっている。 一般的に、子育て支援においては、子供の状態を正確に把握し、保護者に分かりやすく説明することが重要。特に、発達障害や情緒障害など、子供の困難を抱える御家庭では、適切な支援につなぐににくいケースも考えられる。このような状況に鑑みて、本施設では、感覚統合室などを活用し、お子さんの状態を具体的に把握することで、御家族とともに適切な支援計画を立てることができる点が特色となっている。 尼崎市は中核市に移行し、令和8年度に児童相談所が市に移管される予定となっており、一時保護などの迅速な対応が可能になる。虐待などの問題に対して、より柔軟かつ早期の介入が可能になると期待される。今回の視察を通して、県と市が連携し、子供たちの成長を切れ目なく支援していく体制が整いつつあることを実感した。 和光市においても、切れ目のない支援を行っていく上で、埼玉県との連携を行っていくとともに、バランスの取れた施策を行っていく必要性を感じた。